

大塚 敬節
責任編集
矢数 道明

世
近
漢方醫學書集成

37
吉益南涯

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 37

吉益南涯 (一)

第II期
全30卷

昭和五十五年六月二十五日 発行

編者

大塚敬節
矢数道明

発行者

中村安孝

発行所

株式会社
名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八)一五二七〇番代
振替口座 東京七一〇七四九番

製版所

株式会社
日本写真製版社

印刷所

有限会社
伊藤印刷

製本所

辻本製本所



子約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えます。

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



吉益南涯肖像

凡 例

一、本書第三十七卷「吉益南涯(一)」には、『氣血水藥徴』『続医断』『医範』『観證弁疑抄』『続建殊録』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録した。影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。但し、『観證弁疑抄』は原寸である。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

二、版本の場合、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。但し、写本の場合はその限りではない。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

氣血水藥徴 矢数道明所蔵写本 一冊

続医断 版本(文化八年版) 二卷一冊(大塚敬節所蔵)

医範 版本(文化八年版) 一冊(非方議外と合一冊)(大塚敬節所蔵)

観證弁 研医会所蔵写本 一冊

観證弁疑抄 大塚敬節所蔵写本 一冊

続建殊録 版本（文政八年版） 一冊（大塚敬節所蔵）

一、解説は松田邦夫（日本東洋医学会理事）が執筆した。

一、巻頭の吉益南涯肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（昭和十一年、刀江書院）によった。

解 説

松 田 邦 夫

父東洞の偉業を發展させた南涯

吉益南涯（一七五〇—一八一三）は吉益東洞（一七〇二—一七七三）の長男で、寛延三年（一七五〇）京都で生まれた。名を猷、字は修夫、初め謙斎と号し、後南涯と改めた。幼名は大助、後に周助といった。母は高木氏。大助は幼い時から容姿端嚴淳厚で、成人の如き風格があった。生父の道を繼承する志があり、古方による疾医の道を父東洞より享け、日夜精研して怠らず、大いに進歩するところがあった。

年二十四のとき、万病一毒の古医方を唱えて一世を風靡した医傑、父東洞が没したので、その

遺業を嗣いだ。そして、二人の弟、東岳と羸齋（辰、南涯の後を承け、大阪にて業を開く。文化十三年没。五十歳。『傷寒腹証弁』『金匱要略記聞』の著あり）を養育しながらよく家を修め、多くの門人を薫育した。從遊の士多く、その一門は大いに隆盛を極めた。

別掲の矢数道明氏資料の吉益家家系の如く、南涯は京都吉益家を伝え、養子北洲は金沢吉益家を、弟羸齋は大阪吉益家を創立している。

南涯は天明六年（一七八六）『方機』を著わして仲景藥方の活用を示したが、天明八年（一七八八）京都に大火災があつて家産は灰燼に帰してしまつたので、大阪船場伏見街堺筋の仮住居に移つた。寓居の大阪でも市民の治を乞うものに数百人に及ぶほどの盛況で当時、大阪府下で昔よりこれほど流行した医家はないと称せられた。浪華は京都の南にあつて水の涯（ほとり）であるところから自ら号を南涯と改めた。

四十三歳のとき大阪の寓居を弟羸齋に譲つて、自らは京都三条東洞院西の旧地に居宅を構え、永住の地とした。

この頃氣血水説（後述）を創唱し、これによつて『傷寒論』を解釈した。この新説は衆医の関心を集め、仲景の藥方をこれによつて説明しようとして、『氣血水藥徵』を著わした。さらに『觀證弁疑』『方庸』等によりその医説を確定的なものとした。

そして、南涯は優れた臨床家であり、決して親の七光とか匙のまわらぬ学医でなかつたことは、

『成蹟録』や『続建殊録』などの治験録をみても明らかである。

南涯の人となりについては、彼の弟子中川修亭（壺山）の『南涯先生六十寿序』に述べられている。かつて南涯が浪華で、豪族山中某を治療中に急死せしめたことがあった。そこで他医は死を予告しなかったのは彼が治理に暗く、財利にひかれたためであると謗^そった。これに対し修亭は、南涯はつねに患者に対するとき、ただその病を見るのみで、世の常の医師の如くあらかじめ重病だからといって逃口上を設けたりはしない。まして貧富貴賤を問うようなことはないと述べている。

また南涯が如何に熱心に勉学を続けたかについて、外出するのはただ患者の往診にゆくだけで、遊興の巷に足を向けることは一度もなかった。家にあれば子弟の教育につとめ、弟子に対していないときは必ず古書を読み返しており、方術の研究に余念がなかった。『傷寒論』を室内の各所に置き、少しでもひまがあると、随時これを取って読んだ。あるとき門下生が廁の掃除をしていると、そこにも『傷寒論』が一冊置かれていたという。

南涯が門人を教えるときは、頭の良い悪いを問わず、必ず丁寧にくり返し、諄々として説き示し、なおわからない者には、さらに又くわしく説き聞かせるといいうように倦むことがなかったと修亭は述べている。

南涯の門人賀屋恭安もその著『好生緒言』に、「南涯、子弟を教育するに、諄々として倦むこと



吉益南涯の墓
(京都・東福寺莊嚴院)

なし。羸瘠、能く人をして激昂せしむ。その純厚、英達、いずれか敬信せざらん」と述べている。

南涯の門に籍をおくもの凡そ三千余人に及び、その名を現わしたのも少くない。

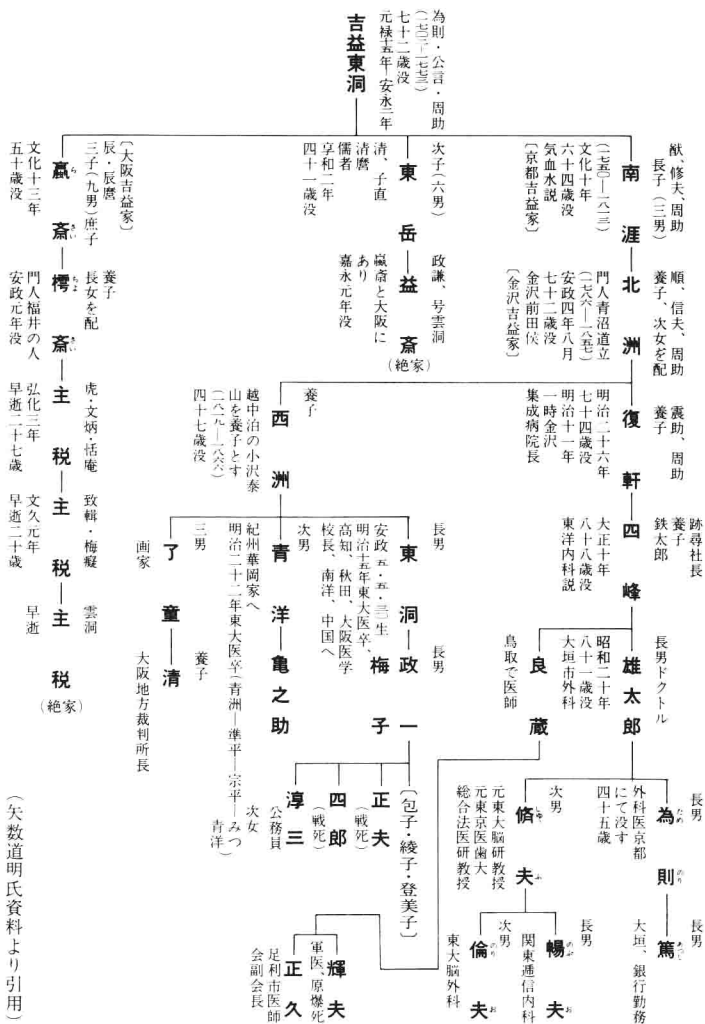
即ち前述の賀屋恭安、中川修亭のほか、大江広彦、武貞夫、華岡青洲、華岡鹿城、賀川玄悦、難波抱節、赤石希範、伊藤大助、山本亡羊等はその優れた人達である。

和田元庸、橋本松庵、石坂恵甫、白土雙儀、

南涯は文化十年（一八一三）六月十三日、病を以てその家で没した。享年六十四。恵日山下莊嚴院東洞墓所の傍に葬られた。（現在の京都市東山区洛東東福寺の寺域、莊嚴院に在る）著書には『傷寒論精義』『医範』『氣血水藥徴』『方機』『方庸』『方議弁』『觀證弁疑』等がある。また『成蹟録』（中川修亭）『險証百問』（中川修亭）『続医断』（賀屋恭安）『傷寒論章句』（賀屋恭安）『続建殊録』（武貞夫）『金匱要略精義』（吉益北洲）など多くの門人が師説を祖述した。

南涯には男の子がなかったので、門人青沼道立を養い、三女（二女ともいう）を娶わせて家業を嗣がしめた。道立は宮中医法橋青沼雄安の第二子で北洲（一七八六—一八五七）と号し、よく養父の遺教を奉じたが、養子復軒（一八一九—一八九三）に家業を委ね、後年金沢に移り、加賀

吉 益 家 家 系



藩医となった。著書に『金匱要略精義』『傷寒論紀聞』などがある。さらに金沢における北洲の養子西洲（一八一九—一八六六）も、その跡を嗣いで加賀藩に仕えた。

気血水説

気血水論は南涯の学説として有名であり、彼を最も特徴づけるものとして知られている。南涯はこれを根拠として『傷寒論』を解釈し、薬能を説明し病証を分類した。

父東洞は万病一毒の学説を唱導して、一世を風靡した。しかし南涯はそれだけでは説明が足らぬと考え、一步を進めて気血水説を確立せんとした。

即ち気血水の三物の精は、よく循環すれば身体を養うものであるが、停滞すれば病となる。毒はこの気血水の三物に乗じて初めて「証」を現わすという。彼の著『医範』によれば、

毒は形なく必ず有形に乗じて、その証すなわち現わる。氣に乗ずるや氣変ず。血に乗ずるや血変ず。水に乗ずるや水変ず。それ血は水殻の血に化するとこなり。これをもって三物あり。

三物の精、循環するときは養をなし、停滞するときは病をなす。万病の変、窮極し難しといえども、これを要約すれば三物の変を出でざるなり。

とある。

氣血水の概念は、今日も漢方の実地臨床にたずさわる私達にとって極めて重要であり、有用なものである。南涯がそれを強調し導入してくれたことで、現代の私達も恩恵を蒙っている。

しかし医史学家が評する如く、氣血水論は南涯の独創とは云い得ぬものである。氣血水の水を痰とすれば、既に田代三喜の説いたところと同じであり、さらにさかのばれば唐宋医学から古代の中国医学に帰することになる。

すなわち田代三喜の病理觀、氣血痰説は、彼の著『和極集』（本集成第一卷『三婦廻翁医書』の中に収録）に明確に詳述されている。三喜はすべての病因を風湿の二邪に歸し、一方体内にあって病を受け入れるものは、血と氣と痰であると解釈した。それ故病は血の病、氣の病、痰（水毒）の病の三つに分けることができるという。南涯が彼の氣血水説を樹てたのは、この三喜の説に負うところが多かったといえる。

病應見于大表

吉益南涯の書

吉益南涯の書
(矢数道明氏蔵)

病應見于大表
病の應は大表に見わる

父東洞の行きすぎを正す

さて南涯は何故氣血水説を唱えたのであろうか。それはまず父東洞の行きすぎを正すためであった。東洞は前人未踏の領域に歩を進めたが、それは一代で完成できるような易しいものではなかった。彼の結論や主張にたとえ誤りがあったとしても、むしろ当然であると云つてよい。中川修亭は『南涯先生六十寿序』で次のように云っている。

それ東洞先生の時に当りて旧習骨に染み、榛蕪（草木が乱れる）路に塞がる。先生の志専ら復古に在り。故に或いは大音之を驚かし、或いは詭言（うまいいまわす）之を論ず。後より之を見れば、遂に弊なきこと能わざるに似たり。亦已むことを得ざるに出づ。南涯先生は則ち志帰一に在り。或いは之を修飾し、或いは之を刪正す。或いは旧規の弊を矯め、或いは草創の欠を補なう。東洞はなお漢高のごとく、南涯はなお孝文のごとし。創業守成もとより自ずから同じからず。乱に在りては則ち武を先にし、治に在りては則ち文を貴ぶ。あに相均しきことを得んや。

勸のするどい東洞は、復古の機運の時流に乗り、彼の万病一毒説は一世を風靡した。しかし次第に東洞の医説にたいする反感、反論は強くなった。『医断』（本集成第十二巻収録）をめぐる永い

論争の如きはその例である。

門人の中にも、東洞の説に疑問をもつ者が少くなかった。和田東郭は、毒のなくなった腹を見せてほしいと頼むが、門人にならなければ見せられないというので、東洞の門人になったが、遂に見せてもらえなかったと東郭の著『蕉窓雜話』(本集成第十五卷収録)に出ている。

一方山脇東洋の系統の古方家は、寛大で包容力があり、治療の役に立つことならば何でもとつて自分のものにしようとした。そして民間薬、のちに蘭方まで研究するようになるのである。

東洞流の古方には、排他的で偏狭なところがあり、『傷寒論』をよんでも自己の医説や自分で作った規矩にそむくところは悉く仲景の意ではないとして削り去った。これを亀井南冥は「臆度にてこしらえた規矩なれば活用なきことは断りなり」といつている。

同じく古方とよばれながら、東洞にもっともはげしい攻撃を加えたのは山脇東門で、父東洋の推挙によって、出世のいとぐちをつかんだ東洞を、死んだら鬼の戸籍に名をつらねる男だろうと『東門隨筆』(本集成第十四卷収録)で罵倒している。

亀井南冥は、東洞の門下生として居ること五、六日で、その説が無学より出た偏狭であることを知って詰問したが、東洞は南冥の若年であることをみて相手にしなかった。そこで南冥は東洞を師にえらんだことを後悔してそのもとを辞去する。その際「英雄人をあざむく」の捨てりふを残したという。その後永富独嘯庵の門人となっている。

東洞を嫌った人達が、その子南涯に冷たかったことは容易に想像できる。吉益派の後継者たち、ことに一統をひきいる重責をになうべく運命づけられた南涯が、「毒によって病の毒を攻める」過激な東洞の学説に修正を加え、治療法にも不備を補いながら、東洞の「直接の経験を基礎とし、事实に即した医学」の確立につとめていったのは当然のことであろう。

天の時に逆らつて

吉益南涯が父東洞に死別したのは安永二年（一七七三）で、二十四歳のときである。古方の四大家といわれた後藤良山（一七三三）、香川修庵（一七五五）、山脇東洋（一七六二）はすでに世になく、香月牛山（一七四〇）、松原一閑齋（一七六五）、永富独嘯庵（一七六六）らも亡くなっていた。しかし、東洞の学統を引く中神琴溪（三十一歳）、中西深齋（五十歳）、村井琴山（四十一歳）、和田東郭（三十一歳）らの他、亀井南冥（三十一歳）、山脇東門（三十八歳）、原南陽（二十一歳）、多紀元簡（二十歳）、華岡青洲（十四歳）があり、又その年には中川修亭、六年後には宇津木昆台が生まれるのである。すなわち文字通り江戸漢方の黄金時代で、百花斉放の観がある。

さて南涯と同じ古方の流れをくむ山脇派は、親試実験の精神から発展して、新しいオランダ医学に接近してゆく。